

第二十三番目の「イフ」＝「学問方法論」

さて、学位論文の流産事件は前述の如く、私の全生涯に対して、絶対的意義を有すると思うが、さらにそこには可成りな副産物ありと言うべきかと思う。そしてそれは何かといえば、かの「学問方法論」の一書である。何となれば、それまで哲学上方法論と名づけられた書は、何れも西欧近代の現象学的方法とか、弁証法的方法等、何れも彼の地にて盛行せる方法論の解説にして、著者自らの用いた方法について記した書は絶無であることを、多年遺憾として来たが故である。

そもそも独自の哲学体系が生れた以上、そこには必ずや、それを生み出した独自の方法があるはずである。されば独自の方法論の生まれないのは、もともと独自の体系は無かったとも言えると思う。

では一步を進めて、すでに西・西田というに人の卓れたる哲学が成りて、それぞれ独自の体系を生み出されたにも拘らず、何故それら二人の大哲学者は、自らの体系を生み出したその「方法」について書かれなかったかということ、私の考えでは、これらの二大哲学者は、明治以来初めて独創的な体系を生み出された人々ゆえその為に忙がしくて、自らの方法を顧みるだけの、心のゆとりが無かった故であろう。それに引きかえ私の如きは、言わば二世であって、これを偉大なる先人のお蔭で、その巨大なる遺産にもたれて、貧しきものではあれどとにかくに、自ら用いた方法を反省して見る心の余裕を恵まれたが故である。かくして成れるもの、即ち拙著「学問方法論」である。

されば今日この著が、一部の人々より、「ある意味では具体的な全一学入門なり」と言われるのも、宜なるかなとも思われるなり。同時に私が後日、「全一学」を主唱するに到れる萌芽は、すでにこの時期に「学問方法論」というが如き書を書いた処に、その遠き因縁がありしとも言って良いだろう。